



TITLE:

<大會抄録>新羅骨品制再考

AUTHOR(S):

李, 成市

CITATION:

李, 成市. <大會抄録>新羅骨品制再考. 東洋史研究 2002, 61(3): 492-493

ISSUE DATE:

2002-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/155432>

RIGHT:

イスラム化以降ハッジの儀禮にメッカでの儀式が加わった。

巡禮時の交易のあり方も變化し、ウカーズなどジャーヒリーヤ時代に榮えた市は徐々に衰退した。商賣のあり方も、ムハンマドは様々な規範を定めたが、コーラン、スンナの定める賣買規定がジャーヒリーヤ時代の慣習をまったく否定するものか斷定はできない。

イスラムはメッカに始まるが、しかし、ジャーヒリーヤ時代の社會秩序は、決してメッカ中心に動いてはいなかったのである。

オスマン帝國の改革思想再考

——「新オスマン人」を中心に——

新井政美

十九世紀にオスマン帝國の西洋化改革を先導し、方向づけたと言われるのが、「新オスマン人」と總稱される一群の知識人である。サードウク・リファト・パシャ（一八〇七—五六）が一八三七年にウィーンに公使として赴任したのち、改革派の同志ムスタファ・レシト・パシャ（一八〇〇—五八）に書き送った見解は、三十九年に公布されるギュルハーネ勅令の骨組みを、ほとんどすべて先取りしたものであったが、同時にその意見は、従来のオスマンの傳統の線上で理解可能なものでもあった。

その後登場した「新オスマン人」たちは、サードウク・リファト・パシャが紹介した西洋の近代文明をオスマン社會に導入すべ

く言論活動を行なった。しかし彼らの多くは、政府の壓迫を受けて一八六七年にヨーロッパへ逃れると、イスラムの文脈で政府批判をするようになる。そしてそうした批判の鍵になったのが「平等」概念であった。彼らは「國民」を希求する一方で、ムスリム・非ムスリム間の平等を「反イスラム的」と斷罪したのである。また彼らは、政府批判の切り札として「シャリーアの實施」をも持ち出した。一八七〇年代にイスタンブールへ歸還すると、彼らの論說からは「イスラム」を鍵とする政府批判は姿を消すが、しかし「シャリーアの實施」や「硬直したシャリーア」という言説自体は生き續け、その後の知識人たちの言論の中で、繰り返し登場することになるのである。

新羅骨品制再考

李成市

骨品制は、新羅の王京人を對象とした族制的身分制であり、聖骨・眞骨の骨階層と、六頭品・五頭品・四頭品などの頭品階層とで構成されていた。このうち聖骨は、夏德女王の死去により六四五年に消滅したと伝えられるが、後代になって夏德女王以前の歴代に對損されたという見解もある。頭品階層は六頭品から順次下降する構造からみて、元來、一頭品にいたる六階層からなっていたと推定される。

こうした骨階層と頭品階層の多階層からなる骨品制の成立につ

いては、骨階層と頭品階層を併せた八階層からなる秩序構造が六世紀に成立したとする通説に對して、九世紀になって眞骨以下の七階層が成立したという説もあつて、その史的展開過程はつまびらかではない。しかし、一九七八年に韓國の國寶に指定された新羅華嚴經寫經跋文（七五五年）に「六頭品」身分の者が檢出され、九世紀成立説は存在しえなくなつた。

ただし六世紀にさかのぼつて多階層からなる骨品制の成立を裏づける明證は全くない。解明の糸口は、七世紀後半まで新羅王京人の身分標識として内外に誇示された六部（「地緣集團」）と骨品制とがいかなる連關を有していたかの検討にある。これを手がかりに、その骨品制度成立時期が七世紀後半にあつたことを提唱してみたい。

地方の商會と在來産業の發展

——河北省高陽縣一九〇六—一九三七年——

リンダ・グロープ

我々の、二〇世紀の中國における商會の役割に關する知識や見解のほとんどは、中國の主要都市の商會の残した記録をもとにしたものである。最近の商會に關する研究は、商會の政治的な役割を檢證するものや、商會の活動が實際に清末民國に生まれた市民社會で始まったのかということを問うものが多い。これらの論文では、主要都市の商會を據點としていた「紳商」が頻繁に研究對

象として扱われている。しかし、この論文ではこれらの研究から視點を變え、ある小さい町の商會の經濟活動を檢證する。

中國における最初の商會は一九〇二年に上海で設立された。それに續いて一九〇三年に天津と福州で、一九〇四年には南京、厦門、重慶、そして温州でも商會が設立された。一九一二年までには全國に七九四の商工會議所があり、その内の五一の總合商會は大きな都市に、そして七〇〇以上の支部は縣や地方の比較的小さな都市におかれた。高陽の商會もこれら多くの小さな商會の一つである。

高陽商會は一九〇六年に、商會の設立に關する規定に従つて設立されたとはいえ、その實際の活動は日本の産地における同業組合に近いものであつた。この論文は高陽商會の様々な活動——産業の發達の促進、税金の優遇の獲得、商業に關する知識の供給、そしてその役員の中國全國商會聯合會における活躍による高陽の知名度の向上——を通してこの商會が高陽の纖維産業にどのような貢獻をしたかを明らかにするものである。

京都客寓時代の羅振玉と内藤湖南の交友について

杉村邦彦

羅振玉（一八六六—一九四〇）は、清末民初を代表する碩學の一人である。特に著述の宏富な點では、『羅雪堂先生全集』全一四〇冊によつても明らかなように、古今に冠絶すると言つても過